

夜釣

泉鏡花

青空文庫

これは、大工、大勝だいかつのおかみさんから聞いた話である。

牛込築土うしごめつくど前の、此の大勝棟梁のうちへ出入りをする、一寸ちよつと使へる、岩次いわじと云つて、女房持、小児こどもの二人あるのが居た。飲む、買ふ、搏ぶつ、道楽すこしは少もないが、たゞ性来の釣好きであつた。

またそれだけに釣がうまい。素人しろうとにはむづかしいといふ、鰻釣いしとさばの糸捌いしとさばきは中でも得意で、一晚出掛けると、湿地みみずで蚯蚓みみずを穿ほるほど一かゞりにあげて来る。

「棟梁、二百目が三ぼんだ。」

大勝の台所口へのらりと投込むなどは珍しくなかつた。

が、女房は、まだ若いのに、後生願ひで、おそろしく岩さんの殺生を氣にして居た。

霜しもつき月の末頃である。一晚、陽氣違ひの生暖い風が吹いて、むつと雲が蒸して、火鉢の傍そばだと半纏はんてんは脱ぎたいまでに、悪汗わるあせが浸にじむやうな、其暮方だつた。岩さんが仕事場から——行願寺ぎようがんにじ内にあつた、——路次うらの長屋へ歸つて来ると、何か、ものにそゝられたやうに、頻しきりに氣の急せく様子で、いつもの銭湯にも行かず、ざく／＼と茶漬で済まして、一寸友だちの許とこへ、と云つて家を出た。

留守には風が吹募る。戸障子ががたく／＼鳴る。引窓がばたく／＼と暗い口を開あく。空模様は、その癖くせ、星ほしが晃きら々きらして、澄切つて

居ながら、風は尋常ならず乱れて、時々むく／＼と古綿を積んだ灰色の雲が湧上がる。とぼつりと降る。降るかと思ふと、颯さつと又暴あらびた風で吹払ふ。

次第に夜が更けるに従つて、何時か真暗に凄くなつた。

女房は、幾度も戸口へ立つた。路地を、行願寺の門の外までも出て、通とおりの前後を瞰みまわした。人通りも、もうなくなる。……釣には行つても、めつたにあけた事のない男だから、余計に気に懸けて帰りを待つのに。——小児こどもたちが、また悪あたたかく暖いので寝苦しいか、変に二人とも寝そびれて、踏ふみぬ脱ぐ、泣き出す、着せかける、賺すかす。で、女房は一夜まんじりともせず、鳥からすの声を聞いたさうである。

然さまで案ずる事はあるまい。交つれあい際のありがちな稼業の事、途

中で友だちに誘はれて、新宿あたりへぐれたのだ、と然^そう思へば済むのであるから。

言ふまでもなく、宵のうちには、いつもの釣りだと察して居た。

内から棹なんぞ……鉤^{はり}も糸も忍ばしては出なかつたが——それは女房が頻^{しきり}に殺生を留める処から、つい面倒さに、近所の車屋、床屋などに預けて置いて、そこから内證で支度して、道具を持つて出掛ける事も、女房が薄々知つて居たのである。

処が、一夜あけて、昼に成つても帰らない。不断そんなしだらでない岩さんだけに、女房は人一倍心配し出した。

さあ、氣に成ると心配は胸へ滝の落ちるやうで、——帯引^{おびひきし}占めて夫の……といふ急^せき心で、昨夜待ち明した寝みだれ髪を、黄楊^{つげ}

の鬢櫛びんくしで搔き上げながら、その大勝だいかつのうちはもとより、慌だしく、方々心当りを探し廻つた。が、何処どこにも居ないし、誰も知らぬ。

やがて日の暮くれるまで尋ねあぐんで、——夜あかしの茶飯ちやめしあんかけの出る時刻——神楽坂かぐらさか下、あの牛込見附で、顔馴染だつた茶飯屋に聞くと、其処そこで……覚束ないながら一寸心当りが着いたのである。

「岩さんは、……然うですね、——昨夜ゆうべ十二時頃でもございましたらうか、一人で来なすつて——とうとう降り出しやがつた。こいつは大降おおふりに成らなけりやいゝがツて、空を見ながら、おかはりをなすつたけ。ポツリ／＼降つたばかり。すぐに降りやんだも

のですから、可塩梅いいあんばいだ、と然う云つてね、また、お前さん、すたく、駆出して行きなすつたよ。……へい、え、お一人。——他にや其の時お友達は誰も居ずさ。——変に陰気で不気味な晩でございました。ちやうど来なすつた時、目白の九つを聞きました。が、いつもの八つごろほど寂莫ひっそりして、びゆうく風ばかりさ、おかみさん。」

せめても、此これだけを心遣りに、女房は、小児こどもたちに、まだ晩の御飯にもしなかつたので、阪さかを駆け上がるやうにして、急いで行願寺内へ帰ると、路次口に、四つになる女の児と、五つの男の児と、廂ひあわい合の星の影に立つて居た。

顔を見るなり、女房が、

「おとつ
父さんは帰つたかい。」

と笑顔して、いそくして、優しく云つた。——何が仕うして
も、「帰つた。」と言はせるやうにして聞いたのである。

いけな
不可い。……

「うゝん、帰りやしない。」

「帰らないわ。」

と女の児が拗ねでもしたやうに言つた。

男の児が袖を引いて

「おとつ
父さんは帰らないけれどね、いつものね、鰻うなぎが居るんだよ。」

「えゝ、え。」

「大きな長い、お鰻よ。」

「こんなだぜ、おつかあ。」

「あれ、およし、魚うおしやく尺は取るもんぢやない——何処にさ……
そして？」

と云ふ、胸の滝は切れ、睡が乾いた。

「台所の手桶に居る。」

「誰が持つて来たの、——魚屋さん？……え、坊や。」

「うゝん、誰だか知らない。手桶の中に充いっぱい満になつて、のたく
つてるから、それだから、遁にげると不可いけないから蓋ふたをしたんだ。」

「あの、二人で石をのつけたの、……お石塔せきとうのやうな。」

「何だねえ、まあ、お前たちは……」

と叱る女房の声は震へた。

「行つてお見よ。」

「お見なちやいよ。」

「あゝ、見るから、見るからね、さあ一いっしょ所においで。」

「わたいわたし、おとつ
「私たちは、父さんを待つてるよ。」

「出て見まちよう。」

と手を引合つて、もつれるやうに、ばら／＼寺の門へ駈けな

がら、卵塔場らんとうばを、灯ともの夜の影に揃つて、かあいゝ顔で振返つて、

「おつかあ、鰻を見ても触つちや不可いけないよ。」

「触るとなくなりますよ。」

と云ひすてに走つて出た。

女房は暗がりの路次に足を引ひかれ、穴へ摺込まれるやうに、頸か

ら、肩から、ちり毛もと、ぞツと氷るばかり寒くなつた。

あかりのついた、お附合の隣の窓から、岩さんの安否を聞かう
としてもしたのであらう。格子をあけた婦おんながあつたが、何にも女
房には聞こえない。……

肩を固く、足がふるへて、その左側の家うちの水口へ。……

……行くと、腰障子こししょうじの、すぐ中で、ばちやく、ばちやり、
ばちやくと音がする。……

手もしびれたか、きゆつと軌む……水口を開けると、茶の間も、
框かまちも、だゝつ広く、大きな穴を四角に並べて陰気いんきである。引窓に
射す、何の影か、薄あかりに一目見ると、唇がひツつた。……
何どうして小児こどもの手で、と疑ふばかり、大きな沢庵石が手桶の上に、

づしんと乗つて、あだ黒く、一つくびれて、ぼうと浮いて、可厭いやなものゝ形に見えた。

くわツと逆上のぼせて、小腕こがいなに引ひきずり退のけると、水を匆はねて、ばちやくくと鳴つた。

もの音もきこえない。

蓋を向うへはづすと、水も溢れるまで、手桶の中に輪をぬめらせた、鰻うなぎが一ひとすじ條、唯一條であつた。のろくと畝うねつて、尖つた頭を恂こうあげて、女房の蒼白い顔を熟じつと視た。——と言ふのである。



さんとうきようでん
山東京伝が小説を書く時には、寝る事も食事をする事も忘れて熱心に書き続けたものだが、新しい小説の構造が頭に浮んでくると、真夜中にでも飛び起きて机に向つた。

そして興そばが深くなつて行くと、便所へ行く間も惜しいので、便器を机の傍そばに置いてゐたといふ事である。

青空文庫情報

底本：「集成 日本の釣り文学 第九巻 釣り話 魚話」作品社

1996（平成8）年10月10日第1刷発行

底本の親本：「サンデー毎日」毎日新聞社

1924（大正13）年10月発行

初出：「新小説」春陽堂

1911（明治44）年

※初出時の表題は、「鰻」です。

※ルビを新仮名遣いとする扱いは、底本通りにしました。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2006年11月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夜釣

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>